

---

black blank

saku

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

black blank

### 【Nコード】

N4632W

### 【作者名】

saku

### 【あらすじ】

ポケモントレーナーというものに意味を見出せず引き籠りがちな少年、カナメはある日母親と幼馴染、そしてその他諸々の人物により、強引に旅へと出されることになる。が、そんな彼が旅に意味を見出せるはずもなく、それは只々終わりへと向かうはずだった。そう、向かうはずだったのだ。一人の少年が変わりゆく日常と伴い変化していく。そんな普通で、おかしな話。この小説は他サイトに掲載させていただいている小説を加筆・修正して転載したものです。

## 1 始まり start

なんだか、とてつもなく嫌な気がする。と、とある少年カナメは心の中で呟いてみる。

そう至るまでの過程を説明していこう。朝起きたら目の前には、全く覚えのないプレゼント箱。

れいせいちゃんちやく（自称）、ずのうめーせき（自称）の彼は、布団を挟んで自分の膝の上に、どーんと居座っていやがるそれを見つけた瞬間にベッドから飛び起き、全速力で壁の隅へ自分の背中を擦り合わせる。その様を決してチキンとか言っちゃいけない。

ようやく目の前の事態を飲み込み、恐る恐るその箱に近づき、外側に付いていたメッセージカードを引きちぎり、鬼のような形相で数行の文章を目で確認する。

『……この手紙といっしょに3匹のポケモンを（ry』

カナメは勢いよくアララギ博士という人物から送られてきた、そのメッセージカードを破り捨てる。多分、これはあれだろう。今から細かいことは説明するから待っててね。

……カナメには幼馴染基親友が二人存在しており、それと自分を合わせたら三人になる。ということでもポケモンが三匹送られてきた以上、その三人で分けるとかいうのだろ。勝手な推測だが……。

問題は、その後にある。

何故、その三匹のポケモンがカナメの元へ送られてきたのか。ただ単純にプレゼントとして贈られた来たのなら、それはそれで喜ぶべきことなのだろう。

しかし。

カナメの年齢は十三歳。もうポケモンさえ持っていれば自由に旅に出られ、一人前のポケモントレーナーになる資格を持っているのである。

そんなポケモントレーナーじゃない彼に、ポケモンが送られてき

たのならば。

これはもう、あれである。

「……………だあ……………」

自分でもどうやって出したのかわからないほどの低温ヴォイス。

我ながら良く出たと褒めてやりたいところなのだが、生憎とそんな余裕は存在しない。

「理不尽だああああアアアア!!」

「何が理不尽なんだよ。どうしたんだい」

心の叫びを轟かせた瞬間、自室のドアをスツと開いてスツと入りこんできた、黒い眼鏡がよく似合う同じ年くらいで黒髪の少年がいる。

そう、彼が例の幼馴染の一人、チェレン君である。

そして、現在に至ったわけである。まあ、全く意味が分からないと思うが、そういうことである。足りない部分はまた説明していこう。

カナメが『嫌な予感がする』と言って心配していたのは、もう一人の幼馴染のことである。

そして、その幼馴染が今どこにいるのかというと、

「ねえカナメ、ポケモンどれにするの？」

「黙れ。いやほんとマジで黙ってくださいお願いします」

真横で、目をギラギラと輝かせながらプレゼント箱を覗き込んでいる。

カナメが即答すると、視線を全く動かさず、なおその状況でふくれっ面をするという、高度なテク（のようななにか）を披露していた。

「なっ、だったら早く選んでよー。せっかく先に選ばせてあげてるのに」

「ベル、そんなこと予定より三十分も遅れてきた君が言えることなのかな」

「いや、それは……」

ベルと呼ばれた金髪の少女に、チエレンが間髪をいれずにツッコミを入れる。それに反応してベルが言い返そうとはしていたのだが、どう考えても自分のほうが不利なため、そのまま不機嫌そうに黙り込んだ。

そう、この幼馴染、とてつもなくマイペースなのである。とてつもなく、ありえないくらいに。

今日みたいにどこかに集合する約束をすると、三十分以上遅れるなんて毎回のことであり、反省の態度を見せるも遅れるから、何かやるせない気持ちになるのである。

他にも色々あるのだが、話し出したら止まる気がしないので止めておこう。

「……というかね、あれだよ。なんで俺が旅に出なきゃならん」

体の中からあらゆる息という息を吐き出し、とてつもなく面倒くさそうに呟く。

「まあ流れだよ。僕とベルが旅に出るから、どうせなら君も。って君のお母さんが……」

「適当すぎねエ！？ 畜生俺の人生なんだと思ってやがるんだあの人！ー！」

「良い経験になるのは保証するよ。……個人差は出るだろうけどさ」  
「ねーチェレン君最後の一言は余分だと思わない？ とてつもなく不安になるんだけどそれ」

「でも、そういわないと『俺にはならない！』とか言っちゃいそうだし」

「うわー正解だよこん畜生っ、あーもう何でこんなことになるんだよ」

「毎日毎日家に籠ってゲーム三昧だからじゃないの……？」

「うっ、べ、ベル。もうちょっとオブラートに包んで話すというこ  
とを……」

「僕にはそれ以外に説明できないけどね」

「ひっでえ、こいつらひっでえ！」

これが所謂マシンガントークというやつだろう。それは見事にカナメのハートをマシンガンのように打ち抜き、抉り取っていく。

カナメはふらふらとした足取りでプレゼント箱に近寄り、全く安定しない指先の動きで、箱を縛り付けている紐をゆっくりと解いていく。焦点が合っていないためうまく紐をつかめず、難航しているようにも見えた。

「ん、ようやく選ぶんだね」

「そうでもないとお前らに殺される」

「人聞きの悪い……事実を話しているだけだよ」

「ほーらそう言う！ あーもう泣きたい寝ていたい！」

ようやく紐を解き終わると、その箱の中に三つの赤白の球体が収められている。

紛れもなく、それはポケモンたちが入っているモンスターボールだった。

「さあ、選びなよ。何度も言うようだけど君に届いたんだ。最初はカナメが選んだほうがいいに決まってる」

それを聞くと、カナメはもう一度溜息をつき、三つのボールの中の一つに目を向ける。

「親切にしてるつもりだろうけど、それはさっさと地獄を見ると言ってるようなもんなんだよねえ……はあ」

そんなことを愚痴りながらも、カナメはボールを一つつかんだ。それを合図に、二番手にベル、「なんで君が二番目なんだよ……」と不満そうな顔でベルにいつつも、素直に残ったボールをチエレンは手に取る。最初から欲しかったポケモンが残っていたのだろう。それぞれのポケモンの名前を、彼らは知っている。

「……んじゃ」

そう呟くと、カナメはボールの中央部あたりに取り付けられたボタンを押し、真上へと放り投げる。ボタンを押す指が離れた瞬間、ボールは急速に膨れ上がった。

直後、ボールが赤と白の部分を分けるように一気に割れ、その隙間から眩いほどの光が溢れだす。正直、目を開けていられるかどうかすらも微妙なところだった。

それを見届けた後、カナメはもう一度呟いた。

「よろしく、ツタージャ」

それが、彼が“再び”手にしたポケモンの名前である。

## 1 始まり start (後書き)

一度書き直したのですが、間違えてそのデータを消してしまったため、時間の都合で原文をそのまま転載します。

また別の機会に修正しますので、ご了承ください。

## 2 少年と草蛇は室内にて forte

「……で、思っただけだよ」

先ほどの大人っぽい雰囲気とやらを醸し出していたカナメの姿は幻影のように消え去り、元の何に關してもほとんどやる気を見せないような雰囲気になり替わっている。それでも先ほどより言動はマシになっているのだから変な話だ。

自分の勉強机のそばの椅子に腰掛けながら頬杖を突き、呆れたような目で、というか呆れた目でベルとチェレンのほうに視線を向ける。

「なんで人の部屋で勝手にポケモン出してんの」

「君も出してたからだよ」

コンマ一秒も遅れていない（ような気がする）即答。あまりにも早すぎたために返しが思いつかないカナメは机の上に三冊ほど積まれていた漫画を手に取り、パラパラとめくりながら目を通していく。さて、今おかれた状況について説明しよう。

数分前、カナメは自分が手に取ってその中のポケモンを単なる確認のために繰り出し、そのポケモンであるツタージャが何故かカナメに懐くに懐いて、ボールの中に戻すにも戻せない状況に追い込まれてしまったのだが。

あろうことか、ベルとチェレンが、それを見て僕も私も“無許可で”ポケモンを繰り出してきたのだ。

「俺がポケモンを出したのは自分の部屋だったからいいとして。お前らオレに許可すら求めてないよな」

「まあいいじゃないか。僕も君と同じく様子見程度で出したんだから」

「……様子見でなんか俺の本棚の本がぶちまけられてられてる訳だが」

「……それはベルにいいなよ。少なくとも僕のせいじゃない。……」

気がする」

そういつてチェレンが部屋の隅に置かれた本棚の方へ、チラリと目をやった。案の定ベルが繰り出したポケモン、ミジユマルの『体当たり』によってばら撒かれた本の姿が。まだ落ちずに残っている本が存在するだけマシなんだ、とカナメは自分に語りかけた。

はあ、とお互いの溜息がタイミング良く重なる。別に双方とも狙ったわけではないのだが、なぜかそれを合図にやる気というやる気が、根こそぎ奪われていくような感じがカナメを襲う。元々旅に出なければならぬという現実を押し付けられた時点で、彼のやる気なんてこれっぽっちも存在しなかったのだが。

そんな憂鬱に浸る二人に、ベルが口を開いた。

「ねえ、ポケモンバトルやろうよ」

……は？ とその場の空気が一気に静まり返る。

あり得ない。こんな状況でそんなことを持ちかけてくるベルがカナメにはあり得ない。

「……おい」

「え、え？ 何、変なこと言っちゃった？」

カナメは自分の中に存在している感情が、ものすごい勢いで何かに染まっていくのを感じる。多分ベルが女の子じゃなかったら殴ってる、本気で殴ってる。

ギョツ、と拳を思い切り握りしめ、体の中から溢れ出そうとしている怒りを必死で抑え込み、何とか言葉を紡ごうと口をパクパクさせてみる。何も知らない人が見れば、その人は海岸に打ち上げられたコイキングとでも表すのだろうか。

「……ベル、君は何を考えてるんだい」

流石にこれ以上何かあるとやばい、とカナメを見て感じ取ったであろうチェレンがベルに向けて言い放った。

「え。チェレンまで。……やっぱり、なんかしたかな？」

「なんかしたも何も、カナメの堪忍袋の緒が悲鳴を上げるほどに君は無神経な言葉を投げかけたんだよ。……確かに部屋にしては広い

けど、ポケモンを戦わせるほどのスペースはないよ」

圧倒的説明の分かり易さ。しかも余分な部分を省いて的確に核心をついてる気がするっ、バトルができないよ！ やったねカナメくん！

……と、そんな意味の分からない台詞が次々と頭の中に浮かび、希望に満ち溢れた目でチエレンを見つめるカナメが一人。

へっ、これでバトルなんかできるものか。と悪役ぶった台詞を心の中で呟いた後。

「でも、この子達まだ小っちゃいから、大丈夫じゃない？」

やっべ、あれフラグだったかもしんねエ、とカナメは後悔することになってしまう。

ただ、そのフラグっぽい何かを立てっぱなしでほっとく様なカナメではない。それを思いつきり押し折るためにカナメは行動を開始する。

「ベル、お前こいつらだって本気出せば火だって水だってはけるようになるし、切れ味抜群の葉っぱだって飛ばしてくるようになること分かってるか？」

「……そんなことできるようには思わないんだけどなあ」

やっべ、ばれるかもしれない、とまたカナメは先ほどと同じように後悔を繰り返す。

低いレベルのこいつ等三匹のポケモンがそんなことできる訳ないって気づかれるかもしれない、と冷や汗を流しながらもカナメは心の中で丁寧に説明をした。

とてつもなく追い込まれて苦笑いを作るカナメだったが、咄嗟にチエレンのことを思い出し、そちらへと顔を向ける。『マジで助けてお願い』と表情を見ただけでわかるほど焦っていたカナメに、

「……まあいいよ。ポケモンを戦わせるのは僕も賛成だ」

救いの手など存在しなかった。

畜生、と彼は頭の中で暴言を吐き捨てた。

「……ベル、マジで部屋ぶっ壊したら承知しないからな」

一応、多数決によってこの部屋でバトルをすることを認めたカナメだったが、その表情は決して晴れやかなものではない。むしろ不機嫌で話しかけるだけで殴りかかってきそうな気もする。

カナメとベル、お互いのポケモンはもう既に臨戦態勢へと移っていた。

カナメ側にはツタージャ、ベル側にはミジュマル、とタイプの相性だけで見るとカナメ側の方が有利には見えるのだが、前述したとおりそんなタイプ相性がどうか言える技すら覚えていないため、そんなものは全く関係ないものとなる。

つまり、求められるのはトレーナーとしての技量。

そんなことをぼんやりと思い浮かべたカナメだったが、そんなことを彼は全く気にしなごしない。彼はポケモンバトルなんざ勝つほうが勝つ、負けるほうが負けると捉えているため、それをどうしようと思うのが間違いなご、と自分の中で簡単に結論を出す。

たとえどんなにレベル差の離れたトレーナーとポケモン同士がいたとしても、強い方が攻撃を何発も外し、弱い方が急所を連発して運良く攻撃をかわし続ければ、圧倒的な差など“あくまで”パラメーター上のものとなごてしまい、結果は弱者の方へと導かれるのだから。

しかし。

そんなことを述べたところで、弱者よりも強者という力関係が、この世で当たり前なことだごというごことを、彼は知ごっている。

だから。

「フォルテ、色々命令出すけどついて来てくれよ」

フォルテ、と先ほどあのツタージャに名づけた名前を呼び、軽く

呟いた。聞こえたかどうかは全く分からないのだが、それでも別に彼のバトルに対する支障は全くと言っていいほど存在しないはずだ。呆れたような、疲れたような目でベルのミジュマルを見据える。単純にフォルテとの攻撃力を比べてみれば、あちらの方が上なのかもしれないな、とカナメは判断をする。

幕が開けるのは、もうそろそろのことだった。

「んじゃチェレン、審判の方頼むよ」

「ああ。早速始めるけどいいよね」

ああ、と無言のままカナメは頭を軽く上下に揺らし、そのまま静かに黙り込む。ベルの方はといえば、初めてもらったポケモンへ指示を飛ばし、そして戦わせるということに多少は緊張しているようで、少しだけ肩に力が入っているように見えた。

「それでは、……って何を言うんだっけ。まあ、とにかく始め」

気が抜けるような合図とともにザツ、と何かが地面を蹴る音がする。自分はまだ指示を出していないため、あらかじめベルが突っ込むように指示を出し、その副産物なんだろう。とカナメは施行を巡らせ始める。

ここからだ。まず迎撃かわわしてから反撃に移るか。その簡単な選択肢をカナメが選ぶことによつて、この戦いにおける彼の立ち位置が大きく変動する。

そして、彼の選んだ選択は。

“何もしない”。

一秒にも満たない時間で計算、そして答えを出しそれを行動に移す。というのが基本的なポケモンバトルの立ち回り方なのだが、そ

の戦闘スタイルは大きく分かれて三つに分かれることになる。

一つ目は直感などで攻撃を繰り出して戦うタイプ。そのような人物は自分が選んだ適当な行動が正解であることを知らずに実行するような天才に近いのだが、自分が知らないうちに計算を行っているため本人たちが直感で選んでいると勘違いをしている。

このような人物の弱点なのだが、一度弾き出した答えを修正することができないという点にある。自分が知らない内に行っている計算を見つけ出し、間違いがあれば自由に修正することができるといふ時点でそれは化け物と呼ぶしかないのかもしれない。

二つ目は計算に計算を繰り返し答えを導き出すタイプ。このタイプが最も多くみられるトレーナーなのだろう。自分の戦闘に様々なパターンを作り出し、それをぶつけることによって安定した戦闘スタイルを持つ。それが特徴にあたるだろうか。

弱点についてだが、最初に説明した直感で判断するような人物に対し、計算のスピードが遅いという点にある。たとえば予想外の出来事、Aだと思っていたことがBだったという事態に対し、直感型はその名の通り直感で正解をもぎ取ることができのだろうか、二つ目の計算型では一から考え、計算を始めなくてはならないためどうしてもそこに差が生じてしまうのだ。

そして、三つ目。前述した二つを状況によって使い分けるタイプ。簡単に言ってしまうえば天才で本当に終わってしまうような戦闘スタイル。

一つ目で記述したような、一度弾き出した答えに間違いがあれば自由に修正することができる化け物がこの三つ目にあたる。

見当たる弱点がとくには存在しないのだが、強いていうのならば一つ目、二つ目が自分より特化したタイプの人間に出会ってしまうば、それだけで不利な状況になるということだけだろうか。

一見、最大の弱点に見えるのだが、三つ目の人間自体が希少であり、大概が一つ目二つ目を超える能力を持っているため、特化した人物なんてほとんど存在しないのが現状だ。

本題に移ろう。カナメが先ほど記述した三つの戦闘スタイルのどれに当てはまるのか。

それは。

それは。

“何もしなかった”フォルテは、ミジュマルの突撃をもろに食らう結果となる。

ドツ、という鈍い物体同士がぶつかる音が部屋中に響き渡る。カナメの脳裏には苦痛で顔を歪めているはずのフォルテの表情が浮かぶ。その先は考えたくない。

「あ、あたった！」

攻撃が当たる様をその目で確認し、ベルが歓喜の声を上げた。一見相手側のポケモンを自分のポケモンで傷つけ、それを見て喜ぶなどというのは正気の沙汰じゃないだろう。

しかし、これはポケモンバトルだ。

どんなにルールが工夫されようと、それは相手のポケモンを傷つけ、戦闘不能にさせた者が勝ち。というのが腐ってもポケモンバトルの真実だ。

だから、彼女がそれを喜んだっておかしくない筈だ。現に自分だつてこれから同じことを行おうと、頭の中で作戦を練っているのだから。

なのに。それでも。

彼は理解できない。

ギリリという歯ぎしりの音が自らの口から漏れ、カナメは少しだけ目を細める。別に自分が今抱いている感情を外に出して戦ってもいいのだが、それは誰がどう考えたっておかしい。それはあくまで

複数ある選択肢の中の一つを自分が選び、それが結果として反映されただけのことなのだから。

カナメの指先が少しだけ揺れ、細めていた目を元に戻した。

「ごめんフォルテ」

先ほど攻撃を受けたのは単なる様子見だ。一撃で倒されることはまずありえないのだが、念のためどれほどのダメージを受けるのかを彼は頭に入れておく必要があった。

フォルテの表情。相手のミジュマルの攻撃を食らった瞬間の衝撃によってもたらされた音の大小。それらのことをデータとしてまとめる彼の表情は決して変わることはない。ただひたすら、目の前に与えられた勝利条件を掴むために足掻くだけ。

それがポケモントレーナー。

そして彼はポケモントレーナー。

だから、足掻く。

「反撃開始だよ」

彼は、優しく語りかける。

カナメは弱者よりも強者という力関係が、この世で当たり前なことだということを知っている。それに例外があることも知っている。それでもできるだけ、可能性の高い方へ。勝利を掴める可能性が高い方へ。

だから。

カナメは、戦う。

全力で勝利へ。強者へ近づくために。

### 3 空つばの獲得者 Winner

「フォルテ、受け流してそのままミジユマルにから目を離すな」

酷く感情のこもっていない冷めた声。フォルテは自分に対して指示を飛ばすトレーナーが発したその言葉から一つ一つ意味を探し出し、パズルのように一つへとまとめいく。

その意味を自分が理解出来た瞬間、フォルテは自らの細い腕でミジユマルの右耳辺りを滑らせるようにして後ろへと押し流し、できるだけ先ほどの『体当たり』と思われる攻撃の勢いを殺さずに自分から逸らす。

途端にフォルテに降りかかっていた力がふっと消え去り、攻撃の対象であり支えでもあったフォルテを失ったミジユマルは、完全に前のめりの姿勢からフローリングの床に思いきり頭を打ち付ける。

小さな手で額を必死で覆おうとしているあたり相当痛いのだろうか。「OKフォルテ、そのまま『体当たり』」

先ほどミジユマルが自分にぶつけてきたものと同じく、姿勢を低く保ち思いきり床を蹴って頭から砲弾のように飛んでいく。ヒュウという少しだけ風を切る音が耳の中に残った。

「ミジユマル、躲して！」

やはり、そう簡単に相手も攻撃を受けてはくれない。ベルの指示を受けたミジユマルは体勢を一瞬で整え、左足で跳躍し右側へとフォルテの攻撃を回避する。

まだミジユマルの足は、地に着いていない。

「『睨みつける』」

カナメの指示を受け取り思いきり目を細め、その名の通りミジユマルを睨みつける。それを両の目でしっかりと確認したミジユマルは慌てふためき、そのせいかバランスを崩して変な体勢のまま着地へと移る。当然のことながらその状況で上手く着地などできるはずもなく、足を滑らせてまた床に頭からダイブする。さっきと同じく

額からだ。

「畳み掛けてくれ。全力で『体当たり』」

もう一度姿勢を低くし、先ほどと同じく床を思い切り蹴りつけ、拳銃から放たれた弾丸の如く一直線にミジユマルへと向かっていく。フォルテの仕事はここで終わるのか、続くのか。それはまだ誰も知らない。

「わわっ、ミジユマル！ もう一回かわ  
「遅ーよ」

一直線に『体当たり』をぶつけようとするフォルテに対し、慌てふためきながらもミジユマルに指示を飛ばして回避の行動へと移らせようとしたベルだが、それをカナメの平坦な声が遮る。

とはいってもそれだけでトレーナーの指示を途中で切るほどのものではないはずで、簡単な挑発にも似た一言だとカナメは認識していたのだが、それだけで言葉を止めてしまったベルは、トレーナーとしてまだ未熟だということでは彼は一先ず置いておくことにする。今一番カナメが考えるべきであろうことは、そんなベルの実力を確認することではなく、目の前で繰り広げられる戦闘のことだった。彼は一度フォルテにミジユマルの『体当たり』のダメージを量るため、ともに受けるように指示をしてダメージは負っているものの、それがフォルテの行動に影響を与えるわけでもなく、当たり前のことだが逆に作用することも断じてない。

確かに“しんりよく”という特性をツタージャというポケモンは兼ね備えており、前述したように逆、つまりプラスの方面で作用することもないわけではないが、それ自体は瀕死時に草タイプの技を強化するというものであるため、ノーマルタイプである『体当たり』が強化されるというものは無い。

（最初から単調な攻撃の繰り返しになることは分かっている）

彼はフォルテの体力、攻撃力、防御力。相手のミジユマルの体力、

攻撃力、防御力等を適当に予測し、それを計算して一つのこの戦闘に関するデータを作り上げていく。

本来ならば勘にも近い形の予測だけでそのデータを作り上げていくことなど、全くを持っておかしいことなのだが、両者のポケモンのレベルは極端に低く、自分が持つ基本的な知識でもほとんど対処できるために彼はそうしている。

そしてようやくデータを完成させると、彼はまた別の計算に移り始めた。

（フォルテ、つまりツタージャが持つ素早さを生かした戦法。ダメージのことは気にせず、すきを狙った連続攻撃で終わらせる）

簡単な結論。それを頭に浮かべるともう一度フォルテの方へと目を向ける。

カナメの表情は相変わらず変化を見せることは無い。

（予想ではあと二、三発。それをうまく当てればおそらくは）

頭の中で全てを言い終える前に、フォルテの体当たりが何のずれもなくきれいに決まり、ミジュマルの小さな体が吹き飛ばされる。

無防備な状態での一撃だったため、それはどことなく予想はしていたのだが、生き物が思いきり吹き飛ばされるということはあまり目にするものではなく、少しだけ顔をしかめた。

その見慣れない光景を全て確認し終わると、彼は次の指示に移ろうとするのだが。

「……？」

なにかがおかしい。

彼の計算を大きく外れた何かが、そこに存在する。

予測不可能な何かが、今日の前で起こっている。

「……ああ」

吹き飛ばされたなにかおかしいミジュマルを凝視し、それに関して至極簡単に結論を出す。

ぴくぴくとその小さな手のひらを小刻みに動かすが、肝心の肉体は全くと言っていいほど動かない。それはポケモンバトルでは戦闘

不能、または瀕死として扱われる状態で、カナメとフォルテの勝利を意味していた。

問題はそこではない。ならばどうして攻撃を一発は耐えるはずのミジユマルが、『体当たり』一発でその状態に陥ってしまったのか。それは、とてつもなく簡単な答え。

「急所に、あたった」

やる気のなさそうに、カナメは呟いた。

### 3 空っぽの獲得者 winner (後書き)

今回は短めなので間髪入れずに投稿してみました。

もうそろそろ少ないストックが底を尽きるので、更新が遅くなる

かもしれません

。ご了承ください。

#### 4 それを旅立ちとでも呼ぶのだろうか e s c a p e

「……で、この有様はなんなのかなベルう？」

不気味としか言いようのない笑み（のような何か）を浮かべ、カナメは部屋の隅で腰を抜かしているベルの元へじりじりと歩み寄る。その様はよくある戦隊ものの特撮で、怯える子供に『ヒヒヒヒもう逃げられんぞい』とか言ってるような怪人と呼べば想像はつくだろうか。いや、多分つかないだろう。うん。

「う、ごめん！ こんなことになるとは思ってなくて」

「やかましいわ！ こっちはできるだけ穩便にポケモンバトル終わらせようと頑張ってるのに、ポケモンじゃなくてトレーナーであるお前が部屋をグチャグチャにするって馬鹿じゃねーの！？ お前は指示しか出してねーだろうが！！」

彼が怒っている理由は単純明快、自分の部屋を荒らされたことにある。が、それは彼にも予想できたことであり、それだけならばここまで取り乱すことは無かったであろう。実際に彼は部屋を特に荒らされることなく、ほとんど無傷の状態で勝利を勝ち取ったのだ。しかし、問題は何故かその後が発生する。

~~~~~

カナメとベルによるポケモンバトルは、カナメのツタージャ、つまりフォルテの勝利によって終了した。

戦闘を終えて落胆するベルに対し、軽くダメ押しという言葉をかけてやろうと思ったカナメのだが、あと数メートルというところでふと足にぶつかった一冊の本を拾い上げ、だめ押しをするのを後回しにし、本棚に戻そうと歩みを進めたはずだった。

はずだったのだ。

「……あー、負けちゃったってわああああ！？」

「五月蠅いんだよってごっふっふっふっうウ!？」

なぜか、ベルがこけた。それはそれはもう、なぜか分からないけどこけた。

しかも、こけてカナメの背骨になぜか右ストレートを叩き込んで間は二、三メートルは離れていたはずなのにも拘らず、それすらも飛び越えて、だ。

ちよとまでお前ドジッ子属性とかなかっただろ!？ と文句を言いつける暇すらなく、めり込んだ拳はカナメを一直線に突き飛ばし、思いきり頭を本棚へとぶつけることとなる。

(嫌な予感がする、それも頭上から色んなものが降ってくるような予感がする)

次々と脳天から湧き上がる焼かれるような痛みで思いきり顔を引き攣らせつつも、辛うじて自由に動くことが分かった目玉を上へ上へと動かして、その嫌な予感とやらが的中するのかわを確認してみることにする。幸いにもそれは外れて何も起こることは無い、そんな漫画みたいなのが現に起こりうることなんかないんだ、

と、思っていた時期がありました、とカナメは心の中で呟いた。

なんか、今にも落ちないとばかりに何十冊もの本がグラグラと揺れていやがる。

「いやいやちよっとおかしいこんなのあっちゃいけないなんで俺は報われないんだってお」

言い終わる前に、無慈悲にもカナメは本の下敷きとなってしまうた。

そして、現在に至る。

今にもベルを殴り飛ばしかねない（たとえ女の子であってもD.A）カナメを見かね、チエレンは呆れたように目を閉じながら口を動か始める。

「……ベル、さっさとこれ全部片付けよう。いや、片付けなさい」

「わ、分かっているけどカナメが、カナメが！……っであれ」

カナメはいつのまにか無残にもぶちまけられた本に手を伸ばし、せつせと本棚の中へと詰め込み始める。行動自体には表れていないものの、その面持ちは依然として怒りの色を見せ続けていた。

分厚い辞書サイズの本を一冊ずつ両手で持ち上げ、それらが丁度隙間なく詰めれそうなスペースを見つけると、ほとんど力任せに押し込んだカナメは呟き始める。

「……で、この後どうすんだよ。もうバトルはやらないとして、これから博士のところに挨拶でも行くってか？」

少しだけ体の向きを変え、横目でベルとチエレンの二人を見据える。

それを見たチエレンは少しだけ意表を突かれたような様子をし、ベルはというと未だ壁の隅でうずくまり、まるでホラー映画を見るような顔でこちらを見続けていた。

「なんで君の勘はそこまで当たるのやら……。まあ、その通りだよカナメ」

少しだけ呆れた表情でチエレンはこちらに視線を向ける。

それを確認したカナメ溜息交じりにもう一度話し始める。

「その通りっていうのもちょっと違うけどな。そっちがそのつもりでも俺は行かないし」

薄っぺらな文庫本サイズの本を三冊ほど拾い上げると、それもまた先ほどと同じように適当に開いているスペースを見つけ、今度は表紙などが折れ曲がるなど傷つきはしないように丁寧に滑り込ませた。

種類など使いやすさなどお構いなく詰め込んだ本棚に一目向けると、まだ半分以上空いているスペースへと目を向けて溜息をつく。そのスペースいっぱい詰り込まれていたのである。この山は彼の足下に積み重なっており、それだけで体中からやる気というやる気を根こそぎ奪い去っていくように思える。

「……まあ、許してくれよ。ただでさえイラついてるのに、その状態でもっとイラつく奴に顔を合わせたら自分でもどうなるかわからないんでね」

「そんなことだとは思っていたさ」

チェレンは一旦言葉に区切りをつけ、カナメと同じように溜息を一つつく。

「何に怒ってるか、だけどまあ君の場合……」

「あんの巻貝頭なんで俺の分までポケモン送ってきやがった!？」

それじゃあ遠まわしに旅に出るって言うてるようなもんじゃねえか! 別に引き籠ってるわけじゃないだろ? トレーナーズスクール卒業して次へ進級するまでの長期休暇をだらだら過ごしてるだけだぞ!？」

いきなり血相を変えて喚き散らすカナメにベルが肩を震わせ、そのままガタガタと震え始める。ちなみに巻貝頭とはポケモンを彼の元へと送りつけたアララギ博士のことだ。髪型を指してそのあだ名を言っているということは誰にも言っではいけない。

さらに言ってしまうと、彼女がカナメにポケモンを送ったのは単純にプレゼントという意味ぐらいしか含まれていないわけで、カナメが『旅に出るって言うてる』という発言は間違ってることとなる。「それが駄目なんだよ。大体進級するまでって最低でも一年は休めるんだろ? その間中家に引き籠るって親に迷惑かけすぎなんじゃ」「かけねーよ! 少なくともいきなりこけてパンチぶちかまして拳の果てには本棚の中身ぶちまけるようなやつよりはかけねーよ」「なんであたしが出るの……」

この世界には優秀なポケモントレーナーを育成、輩出するためにトレーナーズスクールというものが全国各地に設置されている。

六歳から十三歳までそこでポケモントレーナーとしての知識や、数学や国語などの生活に必要な知識までを学ぶことになり、その学ぶ内容は本来十四歳までに、つまり八年間かけて覚える内容を一年縮め、七年間で覚えるものとなっている。

さて、それならばなぜ学習にかかる時間を縮める必要があったのか。

結論、そのトレーナーズスクールで育て上げた人材を、余っている一年間のうちに世間一般的な旅や、その他諸々のために時間を使わせるためである。

なぜそのようなことをする必要があるのか。それは未来ある子供たちに世界を見てもらう、というのを表向きに掲げているのだろうが、実際には様々な地域の社会制度、及び経済状況をその目で学習させるといふのだろう。悪く言ってしまうえば現実を見させるといふ言葉が似合いそうなのだが、それによって自分が本当に進みたい道進むべき道を見つける者がいるため悪くはないと考えることができる。

純粋に強さを求め、ただひたすら奔走する者。

与えられた時間の中で何かを見つけだし、本当に自分が進むべき道を見つげ出す者。

理想を追い続けるが、決して越えられぬ壁にぶつかり、夢敗れる

者。

それらを含む多種多様の人たちがこの一年間で生まれることになるのだが、例外は存在する。

「……で、この俺がポケモン貰ったときで旅に出るとか思うなよ？ 絶対に思うなよ！」

そう、たとえば最初から旅に出ないつもりの方とか。

「いやね、カナメ。そうでもしないと君のありとあらゆるライフラインがストップするから……」

「ちよつと待て、今お前なんて言った？ ライフラインだとか何とかつてもものすごい命にかかわるようなこと言わなかった？ もしかしたら性質の悪い嘘？」

なんだよこいつ、知らなかったのかと言わんばかりの視線をチェレンから向けられ、そこから連想して一瞬頭の中が真っ白になったカナメだが、すぐさま頭の中の知能だとか知識だとか記憶だとか、ありとあらゆるものを引つ張り出し、かき回し、そしてパンクする。流石の二ト思考戦士のカナメとは言え、何やら自分のへと直接ダメージを与えるような明らかに危険そうなことを冷静に考えられるほど人間が出来てはいなかった。

「……君のお母さん、『カナメが旅にでなかったら持つてる全ゲーマのハードを売り捌いてやる』とか言ってたけども」

「え、俺に言わずに何勝手に話進めてんだあの人」

普段ならばここで皮肉やら悪口などを吐き捨て、完全に否定した後不貞寝でもしそうなのだが、生憎それすらもしていられない状況にカナメは冷静に対応せざるを得ない。……尤も彼に冷静の『れ』の字もあるか、と言われてしまえばそれでお仕舞いなのだが。

何をするにも話が唐突すぎる。とカナメは依然不貞腐れたような態度を取りながら言葉には出さず思ってみる。確かにカナメ自身の性格を考えると、一週間前だろうが一か月前だろうが、はたまた一年前であろうが決して首を縦に降ることは無かっただろう。

しかしだ。五十歩百歩という言葉があるように、結果強制的に旅へと出されるのであれば、どれだけ嫌がってようが当の本人としてはたとえ一週間前だとしても声をかけてほしいものである。

「……とりあえず、今日はもう解散でいいよな。準備とかいろいろあるからためえら二人はさっさと旅に出てコイキングの餌になるのがベスト」

「何を馬鹿なことを。とりあえず出ていくけど、一応アララギ博士には連絡を入れておいてね」

「しねーよ」

最初からカナメが言うことを素直に聞くなど無理だと踏んでいたのだろうか。カナメの呟きに反応を示さず、今まで会話に加われず放心状態のベルを引きずるように連れて部屋の外へ動き出す。バタン、というドアを閉める音が部屋中に響きわたり、静寂に包まれる。

カナメは無言で机の上のモンスターボールを手に取り、その隣で無造作に置かれているボールホルダーに随分と慣れた手つきで取り付ける。スクールに通っていた時には毎日のようにこの動作を繰り返していたため、慣れるのは当たり前だったのだが、どうにもそれに違和感を覚えたカナメは首を傾げる。

（……そういえば、これ使うのっていつ以来だっけ）

ふと考える。手元のボールホルダーをこうして装着するののも一体何日ぶりなのだろうか。スクールの授業、主にポケモンバトルの実戦形式では毎日嫌になるほどやらされていたし、それで使うポケモン及びモンスターボールを運ぶにはボールホルダーは必需品のようなものだから。

スクールが終了して約一週間と二日。その間自分にとって必需品だったものに触れていなかった、というのは何とも不気味に感じってしまう。

（まあいい）

彼はその一言で今の今まで覚えていた違和感に区切りをつける。これからどうせ忘れることに彼はいちいち考えているつもりはない。

寧ろそれ以上に考えてなければならぬことがあるのなら尚更だ。  
ボールホルダーを先ほどと同じように慣れた手つきで腰辺りに装着すると、彼は無造作に置かれていたかばんを取り、必要な荷物を押し込むように容れていく。途中ガチャgチャとプラスチックや鉄などがこすれあう音がしたが、そんなのもお構いなしに手を動かし続ける。

(……まあ、携帯ゲーム機位なら持つて行っても罰は当たらな)  
若干表情をニヤつかせて彼がそのゲーム機を手に取り、鞆の中へと押し込もうとした瞬間。

スツ、という何かがすり抜ける感覚が指先へと。

「えっ」

反射的に言葉を漏らすと同時に、足元で何か金属かプラスチックの塊が落下したような音。それが何を意味するのかは彼には分っていない。分かりたくもない。

カナメは少しずつその落下したなにかの元へ視線を下げていく。人間とは分かりきって確認する必要もないことをわざわざ確認してしまう生き物なのだろう。自分の中では否定し続けたいようなことをわざわざその目で確認し、目を逸らすことも許さないのだから。

「……あ」

そうして下げた視線の先には、見るも無残な姿となったただのゴミ基携帯ゲーム機が転がっているわけで。

「……畜生畜生畜生畜生なんで俺がこんな目に遭うんだよ世界の人口は億なんて普通に超えてるんだから俺じゃなくても……」

場所は移り一番道路にて。例のゲーム機を壊してしまったカナメは、目の前の惨状から逃げ出すように部屋を飛び出し、自分が旅に出る原因となった母親に文句を言うことすら忘れ、逃げるように故郷であるカノコタウンを飛び出して現在へと至る。

今更変わることはない『旅に出る』という決定事項へと何回も何回も罵詈雑言をたたきつけるカナメを見て他の人は何と呼ぶのだろうか。

一通り自分が思いつく限りの悪口暴言等を言い終えたカナメは、ふと自分の腰につけたポールホルダーへと目を落とした。

(……また、こいつを着けては外す日々を繰り返すのだろうか)

カナメは思う。スクールという強制力があつた以上ポールホルダーを半日近く身に着けてなければならなかった日常が、今度は旅というまた別の強制力によって繰り返されることを。その日常が彼にどんな影響を与えたのか、彼にどんな思い出を与えたのか、そして彼にどんな力を与えたのか。

(……分かる訳が、ないんだよな)

今まで以上に重い溜息を一つつき、そのまま瞼を閉じる。別段その行動に意味はなかったのだが、何となく目を開けるといふ簡単な動作にまで彼にはだるく思えてしまった。

何も考えない、何も思わない数十秒。

「……まあいいや。とりあえず歩こう」

目を開けた時、彼の目に映ったのは特に変わりもない、先ほどと全く変わらない光景。

気だるい体を動かして、彼は逃げ出すようにそそくさと歩き始めた。

#### 4 それを旅立ちとでも呼ぶのだろうか e s c a p e (後書き)

大変遅くなってしまいました。投稿しました。待っていてくれた方々、本当にありがとうございます。そして、申し訳ありません。

さて、この話で一旦区切りをつけ新章改め第一章に漸く突入、というようになるつもりです。

今までの話はプロローグのような部分だったということですね。多分。

次の章ではバトル成分多めにする予定です。どうぞご期待くださいー

…追記：

お気づきかもしれませんが、この物語の主人公であるカナメはポケモンBWの主人公とは立場こそ同じですが、外見は全くの別物となっています。

そのうち物語の中でどのような人物なのか、と説明が入ると思いますが、場合によっては登場人物紹介の項目を作って、その中でも説明をするかもしれません。

あと、連休中にもう一話は投稿すると思います。

## 1 遭遇 encounter

どうしようもなくだるい一日だ、とカナメは頭の中で呟いた。

疲労でガタガタと悲鳴を揚げる両膝を強引に曲げ、そして前に押し出すという行為を延々と繰り返す。

予定ではカノコタウンを出発し、一、二時間程度の時間で次の街であるカラクサタウンへと到着する予定だったが、一週間近く引き籠り状態で運動も全くしていなかったカナメに、そんなハイペースで碌に整備もされていない野道を歩き、そして到着できるほど体が鍛えられているはずもなく。

既に予定の二時間を超え、更には三十分も経過した今現在。

彼の心情とは全く逆のイメージを思わせる雲一つない晴天に浮かぶ太陽は、容赦なくカナメに陽射しを照らしつけていた。

「うーい、このままじゃ水分不足で干からびるぞこん畜生」

誰にも届かない独り言を虚空に吐き捨てると、彼はもう一度歩みを進めるため、先ほどと同様強引に足を動かし始める。

尋常じゃないほどの汗で着用していたジーンズを湿らせ、それが素足に擦れる度に不快感が襲い掛かるが、そんなものを一々気にしていられるほどの余裕はない。今すぐにでも疲労で倒れかけで、体のバランスを保つために一片の意識もやれない状況下で、そんな事を頭に留めておけるよう生憎と彼の体はできていないのだ。

そしてもう一つ。二時間半もの時間を歩き続けていた、という事実が『もうすぐ到着するだろう』という意識を湧き起こさせ、半分脳内麻薬を分泌させているような状態だったというのも、彼を動かす原動力となりえていたのだが。

「あ、れ？」

目の前に聳え立つ木、樹、木。

本来ならばカラクサへの道程は、多少整備されていないような草むらはあるのだが、普通の一本道であったはずである。

それならば、何故目の前に樹齡百、二百を軽く超えていそうな大木が立っているのだろうか？

「……これはあれですか」

簡単な答え。そこら辺の五、六歳の子供に聞いても分かりそうなほどに簡単な答え。

とても悲しいなにかを悟ったような表情を浮かべ、カナメはその場にて静止する。ジワジワと首元を伝う汗が長袖のチェックの下に着た黒字のTシャツの中に吸い込まれ、更に気持ち悪さを増加させる中、彼は頭の中で一つの言葉を思い浮かべた。

そして。

「迷った」

くらり、とまるで貧血を起こしたようにその場へ倒れこみ、意識は暗闇の中へと落ちていく。

何も見えない。記憶が曖昧なのだが、先ほどまで木々や、道に生い茂る雑草で囲まれていたはずの空間は黒一色で塗り潰され、他の色が混じることを許さない。

目の前の世界は闇すらも包み込む闇で覆われ、暗き絶望と悪夢の世界へと……

なるはずもなく。

(単に瞼を閉じていただけでござる)

横たわる地面の感覚を肌で確かめ、彼は頭の中でそう簡単に思う。なんでこんなことになったのかな、と彼はとりあえず行動を起こ

そうとしたのだが、先ほどの気絶の原因の一つでもあった疲労がさらにエスカレートしたようで、それに呼び寄せられた筋肉痛という新たな障壁により、体を動かそうにも動かせない。

仕方が無く体を動かさない他の動作を起こそうと思ったのだが、そこで彼は一つの疑問にぶつかってしまった。

(……あれ、なんか地面にしては柔らかすぎるんじゃないか)

なぜか地面が固くない。むしろ柔らかい。例えるのならばクツシヨンのように。

少なくともカナメが倒れた場所は森林の奥の奥であり、そんな人工物のような肌触りを持つようなものなど、落ちていかなかったはずなのだが。

「……布？ これ布団そのものか？ いや、だとしても、そりゃあ」  
恐る恐る目を開けると、視界を覆っていた暗闇は消え、少し灰色がかかった白に埋め尽くされる。

そうだ、目の前のそれは天井だ。と今までの違和感にそう結論を出し、カナメはその天井とやらを凝視する。知らない天井だ……と呟いても見ようかと思ったのだが、気絶し、いつのまにか全く知らない場所に連れてこられていた、という今現在自分が置かれている状況を頭の中で再確認すると、そんなふざけたようなことを口に出す気分にならない。

いまいちはずきりとしらない状況の中、カナメはもう一度今の状態について考えを巡らせることにする。

(天井つてことは、ここはどこかの建造物つてことになるのか。んで、俺が寝かせられているのはさっきの布の感触からしてベッドかなんかだと。で、そこから……起きていきなり酷い筋肉痛動けなかった……ん？ あれ？ 筋肉痛つてそんな短時間で起きるものだったか？ まあ、とりあえずそのことは置いて。一番問題なのは俺が今どこにいるかってこと、連れてきたのはどのだけかってこと、それから……)

ガチャリ、と自分の右耳へ不意に飛び込んできたドアノブを捻る

音が、カナメの思考を少しばかり停止させる。起きてからつい先ほどまで、全くと言っていいほど音がない空間にいたせいか、その音はやけに印象的だった。

ドアを開ける金属の音が鼓膜を揺らし、地面を擦るような足音が届く。

「……誰ですか？」

「あなたをここに連れてきたその本人」

細い糸を思わせるような細かい声。声の質からするに、自分と同じ十三〜十四歳の少女だとカナメは考えるが、彼女の言った言葉が本当だとすると、身長が百七十に近いカナメを、ついさつきまで自分が寝ていたこの場所まで運んできたというのだろうか？

よく分からない状態のまま筋肉痛で動かないはずの体を強引に動かし、両手で敷布団を押し出して上体を起こす。人間って無理すれば何でもできるんだなあ、と感心した途端に先ほどの比にもならないほどの激痛が襲いかかったのは置いておくとしよう。

「……大丈夫？ 体が固まってるよ？」

「いや、まあ、うん。筋肉痛がひどすぎて固まってるだけで……」

起こした上半身をあまり動かさないようにして、カナメの右方向にいるその少女へと視線を向ける。

（予想通り、俺と同じぐらいの女の子で……って、おい？ かなりレベル高いんじゃないのあの子？）

その少女とやらは数メートル離れたところに立っている。

整った顔立ち、黒一色で染められた長髪。服装については大した知識を持っておらず、よく分からなかったのだが、所謂美少女と呼ばれるでも何らおかしくない容姿を持った彼女は、自らが開けたドアの近くの壁を背もたれにして佇んでいた。

綺麗だなーとかそういう無駄なことを考えるのを極力抑え、一通り自分をここに連れてきたのがいったいどういう人物なのかを確認し終えたカナメは、その彼女にいくつかの質問をぶつけることにする。

「で、とりあえず質問なんだけども。ここってどこなんだ？」

「カラクサシティのポケモンセンター。ここは二階の一室で、手続きは済ませてあるから、今日一日はここで休んでおいた方がいいと思う」

ああ、と納得したようにうなずくと、カナメは質問を続ける。

「ご丁寧にも。で、また質問で悪いんだけど、手続きって具体的にどういうことをしたんだ？ 確か、トレーナーカードが無けりゃポケモンセンターなんて使えなかったと思うんだが」

「病人ということを入れてもらった。本当なら鞆を漁ってカードを出してもよかつたんだけど、流石に気が引けたから」

「……ま、気絶でぶっ倒れた人間をカードが無いからってだけで突っぱねるほどこの人は鬼じゃなかったわけだ。ありがとう、助かったよ」

そうカナメが簡単に礼を言うと、彼女はあまり表情を変えることなく頭を軽く上下させた。

「で、最後の質問だけど」

そう呟いたカナメは少しの間だけ黙り込み、軽く瞼を閉じる。その様を目の前の彼女は黙りこくりながら見つめるわけだが、カナメがその最後の質問とやらだけに間を置いたのを不審に思ったのか、少しだけ首を傾げて彼の言動に耳を傾けた。

少しだけカナメは息を吸って、

「……俺を、どうやって連れてきた？」

そう、言い放つ。

今までカナメの質問にはほとんど間も空けずに答えていた彼女だったが、なぜかこの時ばかりは戸惑ったような仕草を見せ、目に掛かるか掛からないかまで伸びた前髪を右手で掻き寄せ、少しだけ誤魔化そうとする。

「思えば、何かおかしかったんだよ。あんたがここまで俺を運んできたとしても、見たところあんたはそんな力持っているように見え

ない。まあ、あんたが俺を運べるぐらいの力を持ったポケモンを持っているなら別だけど……」

「……別、だけど？」

言葉と言葉に間隔を置いたカナメに対し、その少女は先ほどまでとは打って変わって困惑したような様子を見せる。

その様を見て、カナメはここまで連れてきてくれた恩人に対して気が引けるなあ、などと思いつつも、彼は言葉を続ける。

「あんた、ボール一個も持ってないよな？」

「……………」

やっぱりなあ、とカナメは頭の中で呟く。

少女は俯き、視線を自分の足下へと向ける。ベッドに腰掛けていたカナメからはその表情は窺えなかったが、多分暗い顔をしているんだろうな、と適当な予想を付ける。

思えば、実に不可解なことだった。目の前の彼女が体重五十キロ近くあるカナメの体を引きずり、カラクサタウンのポケモンセンターまで連れてくることなんてまず不可能に近い。

見たところ彼女はボールホルダーも装着せず、ボールをどこかに収納しているようにも思えない。どこかに隠し持つてる、というのならはまだギリギリ説明はつくのだが、それならば先ほどの質問の時点でそう答えているはずだ。黙り込む必要もない。

誰かの力を借りた、というのでも説明はつくが、そうだとしても先ほどの質問でそう答えていなければおかしい。

そう、彼女の言ったことが正しいのならば、説明できない点が浮上してしまう。

「ま、そんな考え込んでいうようなことじゃないよ。ここに連れてきてもらった、ってだけでも俺は満足だし、寧ろあんたに死ぬほど感謝しなきゃいけない。下手すりゃ野垂れ死んでたんだからな」

「……………」

「だから、さ」

そういうと、カナメは依然俯いたままの彼女へ向けてにつきりと

ほほ笑みながら、

「ありがとう、あんたのおかげで助かった。変な質問して悪かったよ」

そういうと、もう一度白い天井へと目を向ける。別段表情を変えたりも無かったカナメだが、知らないうちに口元はほころび、少しだけ笑っているような顔を作っていた。

目の前の少女も顔を上げ、カナメの方へと視線を向ける。

「答えられなくて、ごめんなさい」

「いんや、別にいいよ。本当ならこつちが謝るべきなんだから」

「……体の調子が戻ったら、一度一階にいるジョーイさんに話しかけたほうがいいのかもれない。一度カードを出して、正式な手続きを踏んだほうがいいよ。私が行ったことは、殆ど例外に近い仮の手続きだから」

「ああ、そうするつもり。……細かいことまで悪いな」

そうカナメが言うのを聞くと、彼女は背を向けて部屋から出ていくとする。まあ、ここまで親切にしてくれたんだからもういいよなーとおもったカナメだったのだが。

「あ、ちよつと持って」

そう呼び止めると彼女は体を振り返らせ、相変わらずの無表情でこちらへと振り返る。その動作できれいな黒髪がさらさらと揺れた。俺はカナメって言うんだけど、あんたの名前は？」

視線を彼女へと向け、これといった表情を見せずにそう問いかける。一応、目の前の彼女にもう一度出会ったら、今回の礼でも言えるよう、名前ぐらいは憶えておきたいのだ。

目の前の彼女は、少しの間黙り込み、視線を下に落とす。そこまで名乗りたくはないともとれる彼女の行動に、カナメは少しばかり訂正をしようとするのだが、運悪く今まで忘れていた筋肉痛が牙をむき、彼の全身に襲い掛かった。

今すぐにも彼女に『無理だったら言わなくてもいい』と言いたいカナメだったが、痛みでをこらえるのに必死で言葉を出すことが

できない。

そうこうしているうちに、彼女は考える仕草をやめ、

「……私は、ミヅキ」

そう小さく口を動かして呟くと、ミヅキと呼ばれた彼女は部屋から出て、気づいた時には扉を閉めていた。

漸く痛みが治まり始めたカナメが目を向けると、ミヅキは既にどこかへ行ってしまったことに気が付き、少しだけ溜息をついてもう一度ベッドに横たわる。

無理に言わせたかなー、と少しだけ後悔しながらカナメは目を閉じる。

(……もういい、寝る)

そう不貞腐れてゆっくり息を吐くと、また気絶した時と同じく意識は暗闇の中へと落ちていく。

ただ、あの時よりは心地よい微睡だった。

## 1 遭遇 encounter (後書き)

投稿完了。

ギリギリ投稿できてよかったです。うん。

今回登場したキャラはまあ……あれですね、うん。分かる人にはわかると思います。

そのあれが一体何かわからない人がいたら、この先の話で分かると思いますので、どうぞご期待ください。

## 2 衝突 battle

部屋の明るさからしてもう陽は落ち、夜の闇へと包まれた部屋の中に、カナメはふと目を覚ました。

片腕を上下左右に動かし、体の調子を簡単に確かめてみる。体に残っていたはずの筋肉痛はある程度落ち着いたようで、楽にとまでは行かないがある程度自由には動かせるようになっていたのを確認し終わると、横たわっていたベッドからいつもよりゆっくりと体を起こし、傍に置いてあった物置の上の照明のスイッチを押す。

暗闇に慣れていたせいとその光がやけに眩しく感じられ、目が焼けるような感覚がカナメに襲い掛かる。

しばらく目を瞑り続け、ようやくその光に慣れてきたカナメは、照明の横に置かれてあった靴を手に取り、ベッドから立ち上がって右肩に引っ掛ける。そんな簡単な動作で筋肉痛が顔を見せるといっても、なんだか情けない話だとカナメは思って、小さい溜息をついた。

「……なんか、腹も減ったな」

空腹で今にも腹の虫が鳴り出しそうな腹部を左手で軽く抑える。思えば、今日の正午辺りから夜の今現在まで何も口にしていないというのは、流石に成長期真っ盛りであるカナメにとっては辛いもので。

ポケモンセンター使用への正式な手続きに加え、腹ごしらえも目的に追加したカナメは、一度外に出るため出口の方へと歩み寄り、踏み潰しかねない勢いで靴を履いてドアノブへと手をかける。

廊下に出て一階に向かう途中、躓いてこけそうになったことは置いておこう。

カラクサタウンポケモンセンター一階、入り口近くの食堂にて。

ミヅキに言われた通り正式な手続きを済ませ、もう一つの目的である夕食をとるため、ここに来たカナメだったのだが。

「……いやー、こんなに混んでは普通思わないよド畜生」

目の前には物凄い長蛇の列。七〜八メートルを優に超えたその人の列はどこからどう見ても尋常じゃあない。

時刻は先ほど壁に掛けられていた時計を確認し、七時半を少し超えた時刻だというのをカナメは確認しており、その時刻の食堂は夕飯やら何やらで、ある程度は混んでいるだろうと踏んでいたのだが、ここまで人が集まることは全くの予想外であり、そんな状況でこの列に並ぶ気にもならない。

何かの間違いなんじゃないのか、あの人だかりは食堂ではなく他の場所に集まっているのではないかとあたりを見回してみるが、どう見ても食堂の受付からまさしく蛇のように並んでいるようにしか思うことができない。

(ある程度の空腹は我慢して並んでみるか? ……いやいやいや、そこまでの忍耐力、このカナメにはありませんよ)

あまりの光景に口の右端を引き攣らせ、その場を半ば絶望したような目で傍観するカナメは今にもへたり込みそうにも見えた。

キリキリと空腹で締め付けられるような痛みを与え続ける腹部を右手で押さえつけながら、ポケモンセンターの外にふと目線を流してみる。

そこにあつたのは。

「……そうだ、コンビニへ行こう」

「……なにこれ、デジャヴ？」

「え？ ……ああ、食堂の行列か」

目の前に集まる人の集団、いや人の群れと形容したほうがいいの  
だろうか。それらが道の中央を遮り、カナメの目的であったコンビ  
二への道さえも遮っている。

ちようどそこに居合わせたチエレンと合流し、二人共々苛々しな  
がらその場に立ち尽くしていた。

何やら、チエレンも食堂が混んでいるのに見かね、カナメより十  
分早く外へ飛び出してきたらしいのだが、そこでまた同じようにこ  
の集団にぶつかっただらしい。

「……運悪いよな」

「……そうだね」

肩を落とし、俯いて地面に目を向ける少年二人組。傍らから見れ  
ば変な二人組に見えるのかもしれないのだが、片方は疲労困憊で倒  
れた直後、そしてもう片方は幼馴染ベルとかいうやつに振り回されて現在に至り、そ  
して両方ともが空腹だという裏事情を知れば大半は納得するであろ  
う。

こんな時に飛行ポケモンがいたらこの集団などひとつ飛びなんだ  
ろう、とぼんやり考えているカナメに、一つの光景が目飛び込む。

「何か始まるみたいだよ」

「ああ。なんかの宗教勧誘か？」

集団の隙間からみえたのは、カナメから見て横一列に、変な服装  
をした七人が並び、その端と端には無駄に作りこまれたような旗が  
二本たてられている。

どうせ碌なものじゃない、と見ただけでそう判断したカナメは、

先ほどと同じように空腹と疲労で頂垂れる作業へと戻る。どうせ人々がこれを目当てに集めつてきているのだろっし、パレードのようなものだったら空腹のカナメとて嬉々としながら見ていたかもしれないが、こんな雰囲気奴らがそんなことを行うとは思えない。

苛立ちしか生み出さないこの空間にずっと留まっている気にもならず、諦めてポケモンセンターにでも戻ろうかと思っただが、あの行列二なら武器にもならず、只々その場に立ち尽くす。

八方塞がり、と頭の中で認めたくないような言葉が思い浮かび、そして埋め尽くしていく。

「本当に、宗教勧誘かもしれないよカナメ」

やっぱりかよ、とチエレンから聞こえた声に蒼声を出さず返答し、再び例の変な七人に目を向ける。

先ほどと何ら変わらない光景がどうせ映ってるんだ、と不貞腐れかけたカナメは、そこで一つの違和感に気が付いた。

(……もう一人いたのか?)

そう、その七人を前に、前までいなかったはずの一人の男が立っている。

少しだけパーマのかかった淡く少しだけ色が抜けたような緑の長髪。左右に色が分かれ、随分とごつい装飾と、その真ん中縦半分を境にして、両方に不気味な目玉を描いたデザインのマントに似たようなもの。そして極め付けには右目のレンズが赤いモノクルと、何とも言い難い奇妙な中年の男がそこに立っている。

明らかに場に馴染まないその男に一瞥を食らわせ他カナメは、何とも形容しがたい感情を抱いてもう一度俯いた。

「チエレン、頭痛い」

「僕もさ。……まさかこんな奴らのために僕たちが待たされているなんて、夢にも思わなかった」

そう呆れたように吐き捨てたチエレンの表情をカナメは見なくても分かった。

「俺、多分ばーっとしてるから。終わったら起こして」

「分かった。なんか断る気にもならない」

そう気の抜けた言葉を交わし、手を膝について中腰の体制でカナメは目を閉じる。

途中であの変な男のものとと思われる野太い声が聞こえたが、そんなものお構いなしでカナメは俯き、そのまま動かない。

ただ、一つだけ。

『ポケモンを、解放するのです！』

という声が耳に届いたのを、カナメは憶えている。

「カナメ、終わったよ」

「……ん、ああ」

背筋を伸ばし、今まで集まっていた人の集団に目を向ける。

どうやら宗教団体じみた七人、いや八人はどこかへ消えたようで、目の前の大通りには人を通り越して車が走れるほどのスペースができていた。

「変な奴らだったよ。話を要約すると『ポケモンはトレーナーによってこき使われている、だから解放すれば彼らと対等な存在になれる』とかいう話だったよ。……もっとも、本当にそうだったらとっくの昔に解放されてるはずじゃないか。それに、人とポケモンが助け合わなければ乗り越えることのできない障壁なんて、歴史に数多く刻まれているぐらいだ」

呆れたように、そして憤るようにチェレンが吐き捨てる。

「カナメ、君はどう思う？」

唐突に、カナメが思いもしないタイミングでチェレンが問いかけた。

別に、この質問に対してカナメがとくに考える必要はない。それはカナメが一番よく分かっているはずで、多分ほかのトレーナーの何人かもそう返答であろう答えだ。

「ただ。カナメは考える。」

「一番よく分かっているからこそ。一番簡単な答えだからこそ。」

「少しだけ、おかしな点がある。」

「別に、どうでもいいんだよそんなこと」

「……なんだって？」

「どうでもいい。んなもん俺らが決めることじゃないからそういつてるんだ。お前の言う通りかもしれないし、あの胡散臭い野郎の言う通りかもしれない。それだけのことさ」

簡単に、カナメが考えられる限りでの答え。言ってしまうえば、その質問に答えはない。

確かにチェレンが言うとおり、人とポケモンは助け合って生きてきた。それは紛うことなき事実であるのも確かだ。

しかし、その助け合いの中で人がポケモンを迫害してきたというのも事実だ。ポケモンを捕らえ、使い、殺し、売り捌く。そんな低俗な行為を行う輩も表には存在しないだけで、裏の日の当たらない影では数えきれないほど存在している。

拳句の果てにはその表の人間でさえもポケモンをモンスターボールという檻に閉じ込め、それらを戦わせて楽しむ娯楽を生み出した始末だ。

どれだけその人とポケモンの共存で生み出されたプラスの面があるうとも、人間とポケモンの地位をが平等ではなく傾き始めているのがこの世界の真実なのかもしれないのだから。

「逆に聞くけどさ。お前はポケモンを何だと思ってる？ 仲間？ 友達？ それとも自分の価値を生み出すための便利な生き物か？」

「……何が言いたいんだ、君は」

「簡単だよ。どれだけお前や俺がポケモンと対等な立場にしようと思っても、それを決めることができるのはポケモン自身なんだ。お前の言ってることが正しいのかもしれないし、あいつが言ったことが正しいのかもしれない。だけどそれを決めるのは俺達じゃないっただけ」

「じゃあ、僕がポケモン全般に抱いているイメージも思想も、全てが人間による勝手なものと言いたいのかい？」

「いんや。俺が言いたいのは合ってる間違ってるじゃなく、証明できないから解らないっただけの話なんだよ」

数秒間、時間が止まったようにも思えた。

カナメが思った通りの微妙な空気が流れて気まずい雰囲気にかまれるが、それでもお構いなしにカナメは話を続けようとする。

こんなことを自分が話すと、こういうことになるのは分かっていたから。

「……ポケモンが喋ることができればそれを証明できる。でも俺達には解らない。はい終了さっさと飯食って俺は寝ます」

そう言っただち去り、コンビ二へ向かおうとした時だった。

「じゃあ、ポケモンの言葉が分かることができれば君の言う証明とやらは成立するのかい」

随分と早口な声がかナメのちょうど右耳の方向から伝わり、そちらの方へ振り向くと一人の長身の青年と呼ぶべき人物がゆっくりと歩いてくる。

白黒の帽子を緑の長髪の上にかぶり、白い長そでのシャツ、黒のインナー、ベージュの長ズボンを着け、腰にはルービックキューブに似たような一際目立つアクセサリーが吊るすようにつけられている。先ほどの例の男に髪型が似ているように見えたのだが、それをいちいち考えても仕方が無い、とカナメは適当に判断した。

何よりも今一番大切なのは、そんな細かいことではない。

「……………で？ あんたの言い分だとポケモンの言うことがわかるそうかな？」

そうカナメが皮肉ったような言い方でその青年へと言葉をぶつける。

「ああ、分かるよ。……………そうか、君たちには分からないのか……………」

そういうと目の前の青年は考え込むように項垂れ、数秒間の時間が何の音も立てずに流れる。聞こえるはずの周りの雑音が何故か耳に届かず、ただ鼓膜を揺らしているというのは頭で理解できるんだが、それを頭の中で止めておくことができない。

同時に、思う。

この人間は、どこかが違う。

「僕の名前はN。君たちの名前を聞こうか」

「素直に喋るとでも？」

「嫌だったら喋らなくてもいい。もっとも僕の目的はそこにはないのだから」

そう言いながら自分をNと呼んだ青年は黙り込む。彼が何らかの表情を保っているとかナメは思うのだが、どうにもそれがどのような顔をしているのかを理解することが難しい。Nの存在自体は嫌というほど目立って浮かんでくと言うのに、だ。

「ま、いいや。俺はカナメでこっちの眼鏡がチェレン。俺は強引に旅に出されて今ここに滞在してるってわけだ」

「旅、ね……………。とするとやっぱり君もトレーナーなんだね？」

「ああ。残念ながら」

そう呟いて、青年は腰に取り付けたボールホルダーにぶら下げたボールを一つ手に取り、掌で掴む。

それを警戒してカナメもボールを一つ取り出したが、どうにも嫌な予感がした。カナメの勘によるとこのままポケモンバトルに突入という疲弊した体に一番響くような状況が待ち受けているのかもしれない。

顔を変にひきつらせながら、それを紛らわすために話を続ける。

「……で、何が目的なんだよ？ ポケモンの声が聞こえるとか言っ  
てたけども、それを披露しなきゃただの電波だぜ？ それを披露す  
るためにポケモンバトル、っていうのだとしたらそれこそ嫌な展開  
だけだよ」

「残念だけど、その嫌な展開というものを選ばせてもらうよ。そう  
して君のポケモンの声を聞くのが目的なのだから」

そう彼は告げると、ボールの中央のボタンを押してそれを空へと  
軽く放り投げる。中央部が真っ二つに酒、夜の闇を照らすような眩  
い光が辺り一帯に広がる。

中から出てきたのはチヨロネコという、小さい猫のポケモンだっ  
た。タイプは悪、そのしなやかな体から繰り出される連撃で相手を  
圧倒する、敏捷性に優れたポケモン。

カナメの持つツッタージャ、フォルテと相性が悪いわけではないの  
だが、何しろ攻撃パターンが同じという点では色々都合が悪い。

「君のポケモンに聞くのさ、君のことを。他のトレーナーとは全く  
違う雰囲気を持ち、そして何より僕に似た君のことを」

「うええ…… B Lに俺は興味ないんでね」

そう呟くと、カナメもボールの中央のボタンを押し、先ほどの N  
とほとんど同じような行動をとる。そして同じようにボールが二つ  
に割れ、中から眩い光を生み出し、唯一違う点としてフォルテが繰  
り出された。

「そして、もう一つ」

依然早口で喋っていたはずの N の口が少しの間止まり、眼を閉じ  
る。それが何の意味を持っているのかカナメには分からなかったが。  
直後のことだった。

「君は、おかしいんだ」

その言葉が耳に届いた瞬間。先ほどまで冷静に保ち続けてきたは

ずの何かが弾け飛ぶ。

それが感情でも理性でも、はたまたそれ以外の本当に必要なものだとしても関係ない。今一番大事なのはそんなことではない。

目の前のNという人物は、自分を探ろうとしている。それがどんな損害を被ろうがどんな利益を生み出そうが、そんなことはどうでもいい。とりあえずは知らなければ“何とかなる”。

だからだ。

目の前の奴が自分の情報を手に入れる前に終わらせる。たとえどんなに小さな情報だとしても、それを一切漏らさずに叩き潰す。

「潰す」

そして、そう一言。カナメがそう告げると、ただ相手を知るため、そして排除するためだけのポケモンバトルが始まる。

## 2 衝突 battle (後書き)

投稿終了。

時間がないため結構急ぎ足です。というかテストが間近なので……  
また次の投稿に時間がかかりそうです。ご了承ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4632w/>

---

black blank

2011年10月5日03時22分発行